

公開講演会記録

中国における設景活動

— 環境保全と国際園芸博覧会

環境設景プロデューサー 小林治人



はじめに

私が初めて中国の大地を踏んだのは、1992年2月28日のことである。東京都日中友好協会主催で梅の原産地である大陸を訪問し現地の梅花愛好家と交流しながら北京、南京、無錫、杭州、上海の各地における梅林と年代物の盆梅を拝見し梅花談義をしながら梅花文化に触れたときである。

初めての北京とその郊外の印象は、自転車の多さと寒風に耐えながら樹草を育み続けている土と、巨大な大陸の地平線に沈みゆく夕陽が、畑土の発散

する強いエネルギーを強調し五感を震えさせるものだった。

南京では南京梅花博覧会が開催中で愛好家自慢の盆梅が書と一緒に展示されていてなるほどと合点がいった。会場にいた老師から特に梅花は書を好むからと……説明があった。

この素朴で平和な大地の環境保全を大前提とした設景思想の普及と設景技術の普及が急務であることを痛感した。日本はバブル経済が終焉し我々の職能を発揮する仲間の仕事の機会が激減していたときでもあり、この大陸にこそ次の活躍の場面があると確信した。

1. 開発と環境保全

時を経て、中国雲南省昆明で1999年に世界園芸博覧会（AIPHの最大規模であるA1クラス）が開催されることが決まり、日本国は屋内出展を当時の農林省、屋外出展は当時の建設省と分担し、建設省が日本庭園を出展することになった。その屋外出展プロデューサーに指名され1997年から数回にわたり現地を訪問することになった。当時の昆明では広幅員の未舗装部分が多い道路を牛車と自転車が行き交う中を縫うようにして自動車で現場に通っ

た。

当時中国では国際博覧会開催経験がなかったため、日本での経験を生かして会場計画にアドバイスをしてほしいと博覧会事務局に請われて予定外の会場計画の奉仕もした。

会場全体の建設にあたっては工期の関係で重機を使って造成工事が予定されていたが、働き手が失業するので可能な限り人力で進めるようにとの配慮も求められていた。

日本庭園については日本国出展にふさわしい伝統庭園とするため日本の造園会社に依頼して極めて順調に工事が進められたが、昆明周辺では希望する庭石と松の入手が不可能で、400km離れた大理から運ぶなど苦労の末に無事開園を迎えることができた。

その後2002年4月、北京大学景觀設計院において「観光開発と環境保全」と題して研究会を開いたとき、アジア人共通の人と自然の関わり方のキーワード、アジア人共通の美意識の基礎ともいえる「花鳥風月」「風花雪月」の心が育まれてきた大地を強く認識し

たことで地球環境に対する思いを広く社会に発信することができたらと考えるに至った。

2. 設景について

一般的に見慣れぬ「設景」の語源と概念について述べておきたい。

日本では、英語〈Landscape〉、ドイツ語〈Landschaft〉、フランス語〈Paysage〉、オランダ語〈Landschapen〉などの同義語として、一般的には「風景」「景觀」などと訳され、20世紀末にいたって急速に社会に浸透した。また、概念を包括的に表現した用語として「景域」があるが、専門家の間で利用されるに止まっている。

これらランドスケープと同義語の中でドイツ語Landschaftを植物生態学者の三好学博士が「景觀」と訳されたことは、1937年発刊の辻村太郎の名著『景觀地理学』の冒頭文に記述されて現代では一般的に用いられているが、「風景」「景域」「風土」などの訳語も研究者の間では用いられている。このような概念を持ったランドスケ

ープが、1863年ニューヨークのセントラルパークの計画建設を通して、フレデリック・ロー・オルムステッドとカルバート・ボーによって、ランドスケープアーキテクチャー (Landscape Architecture) という新しい職能の概念を表す言葉として生まれ変わって登場した。

わが国では、このランドスケープアーキテクチャーを1919年より、「造園」と訳して用いてきたが、この「造園」では、本来の意味内容が十分社会的理解を得るまでに至らず著しく限定された分野を意味する言葉として定着しつつあった。

そんなとき、恩師上原敬二先生が「日比谷公園設計の批判について」と題して、1961年6月の『都市公園』誌に論説を紹介されていた。「大正14年11月2日庭園好きの有志は小沢圭次郎氏を招いて会合を催した。席上例によって同氏の設景、設計の二つの文字についての差異に関して啓蒙的な熱論を拝聴した」として、同氏の手紙を紹介している。

「設計は、目論見または算段のことであり、設景は庭づくりの趣向または工夫である、平庭にするとか山水造りあるいは枯山水にするなど、人の心が同じでないように、個別的で自由な空間に対する発想が求められる」。この考え方を私は、「設景」は「景」の創出であり計画対象の全体的空間構成を考へることと理解した。

3. 万国博覧会の意義

万国博覧会は長い歴史の中で、構造と内容の両面から次第に性格を変化させている。



小沢圭次郎

小沢圭次郎（1842～1932）

桑名藩・江戸築地下屋敷・藩医師の家に生まれ、蘭学、英学、漢学などを学ぶ。明治の脱亜入欧・廃仏毀釈運動により失われていく神社仏閣の保護に励み、明治時代を代表する庭園研究者・作庭家として活躍した。晩年「東京府立園芸学校」の講師を勤め後進の指導に当たった。号は「酔庵」

万国博覧会はその時代の変化、文明、国際関係などすべてを反映する性質を持つ催事である以上、時代の流れにつれて性格や構造を変えていく宿命を背負っている。そうした変化は以下の3つの時期に分けられる。

第1期（19世紀後半——生成期）

第1回ロンドン博（1851年）から第一次世界大戦までの、主として19世紀後半以降の50年間で万国博覧会の生成期である。

第2期（二つの大戦に挟まれた1939年までの間）

単に技術だけでなくデザイン面の進歩、芸術性を高め、合理主義、技能主義の思想が社会に広まった。産業と技術の交流が進み1930年代、万国博覧会に主催者の理念や思想を反映させるようなテーマが登場してくる。

国際協力、民族の相互理解、生活上への願いなどが内容に投影されるようになった。交通や照明、コミュニケーション技術の発達、産業技術中心の万国博覧会に芸術、文化的要素が加わり社会生活全般への総合化の方向をたどった。

第3期（20世紀後半——考える万国博覧会の転換期）

第二次世界大戦後から今日まで「科学的技術の発展」「文明の進歩」のもたらすバラ色の未来に対する懐疑的な考え方が強くなり、進歩発展の興行の狂騒は次第に後退し、代わってヒューマニズム、人間そのものに対する意識が強調されるようになってきた。

このような万国博覧会の流れの中で国際博覧会条約によってパリに設置されている博覧会国際事務局（BIE）の認定による国際園芸芸協会（AIPH）のもとで中国最初の昆明世界園芸博覧会（1999年5月1日～10月31日）が開催された。

3-1 1999昆明世界園芸博覧会

昆明世界園芸博覧会開催中の1999年7月21日に昆明世界博覧会開催記念シンポジウムが開催されたとき、日本国出展の日本庭園について報告を行った。昆明世界園芸博覧会に日本国として庭園面積約3700㎡での出展に当たっては建設省ならびに23の地方公共団体、および国際花と緑の博覧会協会の協力

のもとに、一つのテーマに沿って創られた。

a. 庭園のテーマ

本博覧会の開催テーマ「人と自然」を受け、日本の自然と文化を伝える「彩りの庭」とした。

日本の伝統的な庭園文化の思想、技術を踏襲しながら過去・現在・未来を結び、人と自然と文化の共鳴に根ざした庭園の創造を目指し、次世紀へのメッセージとして、昆明から世界へ向けて発信しようとしたものである。

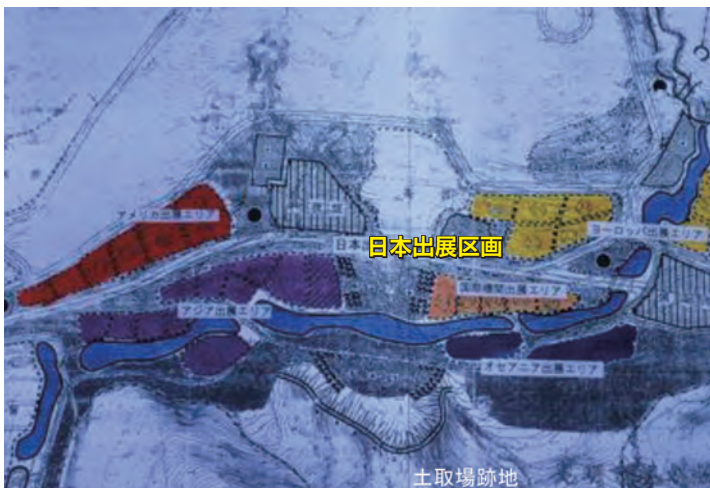
b. 庭園の特徴

出展した「彩の庭」は、池泉回遊式を基本の考え方として空間構成しており、静かに園路を散策しながら庭園文化を鑑賞できるように配慮した。

また、日本の建築技術の中でも高度な伝統技術である数寄屋造りの休憩所は、高度な伝統技術を受け継いでいる宮大工によって建設された。この技は、完成した姿を表面的に見るだけでは理解することのできない木組み部分など、宮大工の誇りが込められていたことをここで披露しておきたい。日本の伝統

文化を支え続けてきた匠たちの、高度な技を表に出さないという粋な気風を感じていただければと思う。

この休憩所を中心とした「庭の景」のゾーンと対峙する「花の景」のゾーンは、日本人にとって、原風景といわれる里山の風景をデザインモチーフとした花壇と素朴な流れを配し、日本各地のさまざまな催事が行える民家風の「花の舞台」を配置して利用空間として特徴付けられている。



昆明会場図



日本庭園入口



日本庭園平面図



庭園から見た休憩所



数寄屋造りの休憩所

c. 庭園の重要要素

「彩の庭」の重要な要素として築地塀と門がある。築地塀は壁面を白で強調して、博覧会会場の中で日本庭園の存在をわかりやすくした。外部と空間を区切ることによって、日本的空間を強調した。庭園ゾーンの入口は冠木門として、数寄屋造りの休憩所へ来園者を迎え入れる際の歓迎の意と意識の変換をはかるようにした。

d. 博覧会の成果

大陸で初めてのA1クラスの世界園芸博覧会開催がもたらしたものとしては、前記したような昆明の明治時代と宇宙時代が同居しているような状態から万国博に際して各種インフラ整備が進み現代都市へ脱皮させる大きな転機となった。

3-2 西安世界園芸博覧会

昆明園芸博覧会会場は周辺が里山で起伏のある地形であったが、西安は全くの平地の裸地を森と湖に変えた万国博であった。テーマは「都市と自然の調和共生」であった。

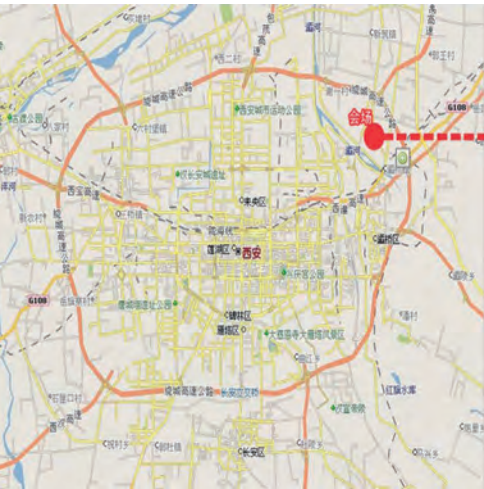
我々はこのテーマの趣旨を生かすために、全体計画と主要個所の計画に自然風の趣を導入することを心がけた。実施設計は上海の同济大学の建築系のデザイナーが担当した。

418 haの敷地は広大で、歩くと結構厳しい。そのため電動式カートを導入した。

会場全体の構成は悪くなかったと自負しているが、夏の日差しが強く日陰が少ないことが気がかりだった。来園者に対するサービス意識の低さを露呈した側面が垣間見えた万国博であったが、全体としては大成功を収めたといえる。

運営にあたっては、たとえば端午の節句のような特別な日は料金を高くして入場者を調整していた。通常100元が150元になるため入場者が減る。減りすぎると通常の入場券の人でも50元プラスすれば入場できるという運営をしている。また内外のVIPの来園があるときも切符の販売を制限して安全確保が図られていた。1日あたりの最多入場者数についても平均7万人になるように調整していた。

この万博では施工管理は一切行わなかったが、昆明以降11年の歳月が経過し会場建設に係る建設技術者のスキルアップが進み、広大な敷地の会場を短時間で仕上げ、素晴らしかった。



博覧会場位置図



テーマ館と入り口



西安会場平面図

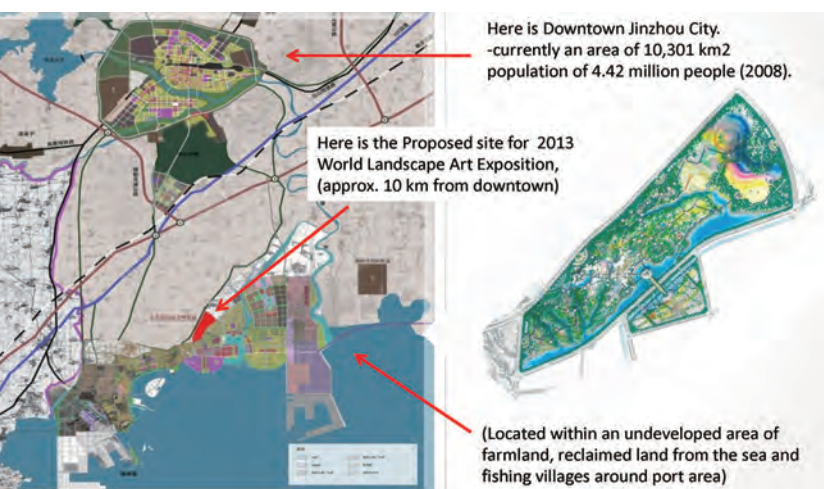
3-3 錦州世界園林博覧会
西安の成功を見た遼寧省幹部がぜひ国際園芸博覧会を錦州で開催したいとAIPHに打診したところ、開催地が中国に偏りすぎていて認定は困難と言われたが、何とかAIPHを納得させる方法はないものかとジェイコム(JCOM) 北京の友人に相談が持ちこまれた。

「小林さん、何とかならないだろうか」と私に相談があった。

以前、ユネスコ傘下のNGO・IF



シンボルタワー



錦州世界園林博覧会会場位置図

LAの第一副会長時代のことを思い起こし、事業を持たないIFLAが同じNGOであるAIPHの催事に参加協力することで新しいタイプの万国博が可能ではないかと気が付き、早速誘致案を策定し、2009年12月4日に開催候補地の錦州市長に届けた。万国博開催についてはBIEとの関係もあるので運営主体はAIPHとし、



IFLA構想図

IFLAは会場内に1区画3000㎡の庭園10か所を設定し世界中の庭園デザイナーに呼び掛けIFLA庭園デザインコンペティションを実施する考えであった。

この発想の元になったきっかけはIFLAが2010年5月に蘇州で世界大会を開催する予定がすでに決定していた

ことであった。その準備のためにIFLA幹部会が蘇州で開催される機会を利用して、錦州の万国博開催について上程しIFLAの賛同を得ることにした。事前にこの会議にAIPH会長・事務局長の参加要請を出しIFLAが決定した構想を認めてもらうことだった。IFLA構想案については私が説明を行った。

協議の結果IFLA・AIPH会長以下幹部会全員の賛同を得て難航していた錦州での開催が決定した。その結果錦州では名称を園芸博覧会とせず園林博覧会とした。

AIPHの承認が得られたことで実施案を策定することになったが、当初230haの会場規模であったが、もっと規模を大きくしたいとの遼寧省の希望で開催地を海辺に移し面積も倍に拡大され、構想案を基に実施案が策定された。無事開会式を迎えることができ、政府関係者、NGO代表らの挨拶の後、会場に関する基調報告で私は、錦州世界園林博覧会が環境保全思想の普及啓発を先導し「地球はガーデン」であること



開会式で基調報告をする筆者



錦州の開催関係者



実施設計平面図

を広く世界の人々に認識させる機会であると訴えた。

▼文献（引用・参照）

小林治人「環境デザインとランドスケープ」日本建築学会『建築年報』

辻村太郎『景観地理学講話』地人書館（1937）

西川治『地図の開く世界像と日本観』日本地図情報センター p214～217（1986）

佐藤昌監修『日本造園修景大事典』第八巻（1980）



開幕式に備えるコンパニオン

筆者略歴（こばやし・はると）

井手久登「景観の概念と計画」『都市計画』第83号（1975）

上原敬二「日比谷公園設計の批判について」『都市公園』第28号

小林治人「日本の造園界の現状と課題」JASLA全国大会（1990）

▼資料提供

株式会社東京ランドスケープ研究所

株式会社国際設景集団

アトラス21

（2023年10月12日・公開講演会）

長野県松本市生まれ、東京農業大学造園学科卒業、株式会社東京ランドスケープ研究所会長。公益法人日本造園学会名誉会員、英国ランドスケープ学会名誉副会長。一般社団法人ランドスケープコンサルタント協会顧問、一般社団法人日本公園管理運営士会名誉会長、設景塾塾長ほか。

著書…『ランドスケープ・デザイン』第一巻（第三巻、理工書、『設景』その発想と展開）ヤルモ出版、ほか。